

在日一世・二世の記憶

高 賛 侑

奨励者紹介[こう・ちやにゆう]

ノンフィクション作家

何事にも時があり

天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

生まれる時、死ぬ時

植える時、植えたものを抜く時

殺す時、癒す時

破壊する時、建てる時

泣く時、笑う時

嘆く時、踊る時

石を放つ時、石を集める時

抱擁の時、抱擁を遠ざける時

求める時、失う時

保つ時、放つ時

裂く時、縫う時

黙する時、語る時

愛する時、憎む時

戦いの時、平和の時。

(コヘレトの言葉 3章1―8節)

情報誌の発行

今日はこのような場にお招きいただきありがとうございます。

私は大阪生まれの在日韓国人二世です。いくつかの大学で非常勤講師をしながら、ノンフィクション作家としていろいろな媒体に原稿を書いたり、本を出したりしてきましたが、近年は人の体験談や歴史的証言などをビデオで撮影し、DVDにして映像記録として保存する活動に力を入れています。

私は20代の頃は映画のシナリオの勉強に熱中しました。現実的には映画制作を実現するのは極めて困難ですが、シナリオを学んだ経験は、その後、演劇の脚本・演出を行ったり、原稿を書いたりするのに非常にプラスになりました。また2001年から同志社大学キリスト教文化センターのオープン・プログラムで、「映像に見る人権・平和・民主主義」というタイトルのもとに世界の名画を鑑賞するという講座を担当することにもつながりました。この講座は16年間続き、残念ながら、今年度の秋学期で終了することになります。

私にとって人生の重要な転機になった一つは、1983年です。当時、在日韓国・朝鮮人はさまざまな分野でかなり活発な活動を行っていたのですが、なかなかマスコミに取り上げられることはありませんでした。そのため、ある地域で行われたイベントなどが、他の地域には知られないという状態が続いていました。そこでそうした活動を紹介する情報誌があればいいのではないかと思い、83年に『サンボン（出逢い）』という日本語版の情報誌を創刊しました。するとわずか16ページの隔月発行であるにもかかわらず、予想以上の反響を呼ぶことができました。

その後、より充実した情報誌を作ろうと思う有志が集まって88年に月刊誌『ミレ（未来）』を創刊し、私が編集長になりました。『ミレ』は株式会社を立ち上げて発行したもので、内容も充実しており、私自身も日本各地に取材に出かけました。また、当時はほとんど情報がなかったのですが、中国、アメリカ、旧ソ連に居住するコリアンを取材しに行き、彼らの歴史と現状を取材し、その一部は本として出版もしました。

毎日新聞にルポの長期連載

情報関係の仕事をしていると必然的にマスコミ関係の人たちとも親しくなっていきます。そして、2000年から毎日新聞でかなり大きなスペースをいただき、さまざまな分野で活躍している在日韓国・朝鮮人を隔週で一人ずつ紹介する「異郷暮らし（タヒャンサリ）」というルポの連載を担当することになりました。

第1回目は、在日であることを公表したボクサーとして初めて世界チャンピオンになった洪昌守（ホン・チャンス）さんでした。リングネームの「徳山昌守」という名前でご記憶の方もいらっしゃるかもしれません。彼は試合で勝利すると、リング上で「祖国統一！」と叫んだりしてマスコミでもよく報道されました。

在日韓国・朝鮮人の紹介が100人を越えた頃からは、枠を広げて他の在日外国人も対象に含めました。在日外国人の実情についてはさほどよく知られていないと思われますが、彼らが日本に来た背景には実に多様な事情があります。ベトナム難民として九死に一生を得て渡ってきた人。また、アパルトヘイトが残っていた南アフリカで生まれ育った人。彼は少年時代から詩を聞き、反アパルトヘイトの集会で朗読する活動を行いました。そして逮捕を逃れるためイギリスに亡命した後、日本に渡り、その後はボランティア活動に励んでいます。

宗教関係ではヒュー・ブラウンさんという方がいます。彼は、アイルランドで激しい内紛が続いていた時期にテロリストになり、「敵」に捕まって頭に銃を突きつけられるという体験もしたことがありました。その後、彼は逮捕されたのですが、獄中にいる時に、本人曰く「突然神の啓示を受けたとしか言いようのない体験」をしてキリスト教徒となりました。その後、牧師になった彼は、日本に渡り、主に監獄を訪問して囚人たちと接する活動を行っています。

毎日新聞の連載は最終的に13年間も継続され、単行本として出版もされました。その間、在日韓国・朝鮮人、在日外国人、NPO関係の日本人など数百人の方々と出会う過程で非常に大きな感動をおぼえ、人の人生の記録を残すことの重要性を身に染みて感じるようになっていきました。

『在日一世の記憶』の思い出

2003年、集英社新書で『在日一世の記憶』を出版する企画が現れ、私が事務局長の重責を担うことになりました。この企画は、在日韓国・朝鮮人と日本人のスタッフ約20人が北海道から沖縄まで在日一

世52名の方々を取材しに行き、最低5、6時間から2、3日かけてじっくりお話を聞くという大規模なプロジェクトでした。

私自身も12名を担当し、非常にやりがいを感じたものでしたが、中でも特に印象に残った方のお話をしたいと思います。お一人は高基秀（コウ・ギス）さんといって、日本で作られたコンピューターにハングルを入力することができる画期的な技術を開発した方です。韓国のサムソンは高さんから技術を学んで、後に世界的企業へと発展していったのです。

私は、取材の了解を得て自宅に訪問した時、驚きました。奥様と長男夫妻が同席されていたのです。一般的に親は、特に父親というのは自分の体験談を子どもたちに語るということをほとんどやらないものです。そのため、私が高さん取材する機会に、奥様や子どもたちにも一緒に話を聞かせようとしたのです。そして取材は滞りなく終えたのですが、なんということか、その翌年に高さんは風邪をこじらせて急死されたのです。

高さんが成し遂げられた画期的な業績は、在日韓国・朝鮮人の間でもほとんど知られていませんでした。もしあの時間を取りをしていなかったら、パソコンのハングル入力という画期的な業績は歴史に残らなかったのかもしれない。

もうお一人は、大阪市生野区にあるコリアタウンの中心的存在だった洪呂杓（ホン・ヨピョ）さんです。洪さんは遠慮深い方なので、当初取材を申し込んだ時は、「私なんか」と遠慮されました。しかし私は「洪さん自身の体験談も大切ですが、ぜひコリアタウンの歴史を記録に残したいんです」と説得して了承を得ることができました。私は以前、コリアタウンの歴史を調べようとしたことがありましたが、昔は在日朝鮮人の記録などはほとんど残されていなかったため断念せざるを得ませんでした。

そうして取材をさせていただき『在日一世の記憶』のための原稿は完成したのですが、その後になって洪さんから電話がかかってきました。「コリアタウンの歴史をきちんと残すための本を出したい」とおっしゃったのです。そこで改めて何度か長時間の取材を重ねた末に、『コリアタウンに生きる 洪呂杓ライフヒストリー』（エンタイトル出版）という本にすることができました。この本は現在、書店での入手は難しいと思いますが、コリアタウンの中央部にある班家食工房には置かれていると思います。そして洪さんも、出版から4年後に亡くなりました。

歴史的証言の映像記録

私にとって新たな転機になったのは、2009年からビデオに取り組み始めたことです。以前は、映像の製作は非常に費用がかかるため自分には手の届かない世界だと思い込んでいました。ところが知人の映像作家から、「今はさほど高額でなくてもカメラや編集ソフトを入手することができる」と聞いて本当に驚きました。

さっそくカメラと編集ソフトを購入し、操作の勉強を始めました。しかし、長年映画の勉強をしてきたので撮影の方はいいのですが、編集の技術が難しくて悪戦苦闘しました。マニュアルを読んでも分からないことがたくさんあり、普段は大声を上げることはめったにないのに、パソコンに向かって「コンチクショー！」と怒鳴ったこともたびたびでした。

それでも友人に教えてもらいながら何とか編集ができるようになると、貴重な体験談の撮影に着手しま

した。在日コリアンにとって特に重要な四・二四阪神教育闘争や済州島四・三事件といった歴史的事件の生き証人をお願いして長時間のインタビューをさせていただきました。

それらの証言は極めて重要な内容なので、何とか歴史的証言として保存、活用するすべはないかと考えた末、朝鮮大学校にある歴史博物館や大阪市立図書館、国立国会図書館などにDVDを寄贈することになりました。そうした過程で痛感したのは、「もっと早くビデオを活用していたら」という無念さでした。たとえば私は、90年代に在日朝鮮人の強制連行に関する証言や遺跡などの調査団に加わり、原稿を書き、写真も撮りました。しかし映像は撮ることができませんでした。もはや取り返しがつきません。そのため、ビデオという手段を手にした後は、重要な体験談やイベントなどは可能な限り映像に残したいと思っています。

ライフ映像ワークの立ち上げ

『在日一世の記憶』は、幸いこの種の本としては異例の2万部を突破しました。その後、『在日二世の記憶』も出版することになり、昨年発行されました。その時は、私が担当した対象者はすべてビデオ撮影しました。その中には、元アートネイチャー代表取締役会長の姜琪東（カン・ギドン）さんもいます。高知県出身の姜さんは、就職差別の中で大阪の釜ヶ崎や東京の山谷でホームレスのような生活を体験されました。ところが、たまたま設立されて間がなかったアートネイチャーに就職してから目覚ましい業績を挙げて、ついに会長にまでなられたのです。定年退職後は、俳句愛好者の間で最も人気のある『俳句界』という雑誌を発行されています。『在日一世の記憶』と『在日二世の記憶』には、こうしたものすごい体験の持ち主たちの半生が掲載されているので、ぜひ読んでいただきたいものです。

私はこうした過程を経て、昨年、ライフ映像ワークという個人企業を立ち上げ、主に歴史的証言や体験談、各種イベントなどを有料・無料で映像記録する活動を続けています。

自分史の重要性

私は今年4月から園田学園女子大学の社会人向け講座で自分史を書くという授業を担当することになりました。自分史というのは、自分がこの世に生きた証を残すとともに、家族のルーツを子や孫らに伝えていくという重要な意義があります。またたとえば、兵庫県に住まれている方なら誰もが体験した阪神・淡路大震災のような歴史的出来事については、その体験者はぜひとも体験談を残すべきだと思います。これらの全体像は新聞や雑誌などに書かれていますが、その時あなたは、あなたの家族はどういう体験をしたのかということを具体的に記録するのは当事者の義務だと言って過言ではないと思います。

しかしながら自叙伝を書籍として自費出版しようとする、大きな負担がかかります。作り方によって異なりますが、通常自費出版の経費は100万円から150万円もかかるうえ、原稿を自分で書かなければならないという困難がともないます。しかし本人が体験談を語るのをビデオで撮影するという方法を使えば、ごく簡単に記録を残すことができます。もちろん自費出版が可能な方はそうされるのが望ましいのですが、それが困難な方はビデオ記録をお勧めしたいと思います。

特別な大事件の体験者に限らず、すべての人にはかけがえのないライフヒストリーがあります。ですから私は、すべての人が最低1本、できれば10年に1本ほどのペースで映像記録を残されることをお勧めし

たいと思います。

両親の取材を

今日は若い方も多数いらっしゃいますが、最後に、私が以前、近畿大学で文章の書き方に関する授業を担当した時のお話をしたいと思います。一般的に文章の書き方という授業は嫌がられる傾向がありますから、いろいろな方法を使って行いましたが、最も成功したのは、学生たちに取材を体験させるという試みでした。かつて私が取材した方々に協力をお願いし、学生たちがその中から会ってみたい人を選んで取材に行くようにしたのです。すると学生たちは初めての体験なので非常に緊張して取材を行いました。中には「大学生活で最も有意義な体験だった」という人も少なくありませんでした。

確かな手ごたえを感じた私は、その後、新たな試みとして、「自分の親を取材する」という選択肢を提案しました。すると、少なくない学生が父親か母親の取材を選択した結果、「今まで聞いたことのなかった出来事を知ることができて非常によかった」という反応を示しました。

その中でも一人、特に記憶に残る男子学生がいました。彼は物事に対して斜に構えるタイプでしたが、父親の取材を行いました。そして後日、彼は教室で「この5年間、父親と会話をしたことがなかったが、今回取材ができてよかった」と言ったのです。突然彼から取材の話を持ち出された時、おそらく父親は驚きつつ、内心うれしかったことでしょう。

親からすれば、我が子には自分や家族が生きてきた道を知ってほしいという想いが必ずあるはずです。自分自身のルーツをよく知るためにも、ぜひご両親の体験談を取材していただきたい、可能なら映像で記録・保存されるよう強調したいと思います。つたないお話を聞いていただきありがとうございました。

2017年9月27日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録